生物教育と植物保護

渡辺　明

近年、自然保護は流行している。知床の原生林保護がきっかけとなり、ナショナル＝トラスト運動の名が広まったのは、何年前のことだったか。その後も、瀬戸大橋への反対運動、中海の干拓、白神山地のブナ林、三宅島、池子の森、石垣島――毎年のように、日本各地の開発と自然保護の問題が大きく報道される。この国では、誰もが真剣に自然保護を願っているようにさえみえる。しかし、はたしてそうだろうか？瀬戸大橋を例に取ると、建設前は瀬戸内海の生態系を死滅させると、随分反対の声も大きかったように思うが、いざ完成すると、誰もが待ち望んでいたかのように報じられる。あのコンクリートで固められた与島の姿を哀しむのは、私だけなのだろうか。いや、遠く離れた四国の話など持ち出さなくとも、今年はリゾートブームとかで、魚沼地方はゴルフ場とスキー場がどんどん広がり、湯沢町はマンション街に変身した。いったい、どれだけ木を切れば気が済むのだろう、自然保護運動の、なんという無力。しかし、我々がいくら叫んだところで、金に目がくらんだ人々にとっては馬の耳に念仏、蛙の面に小便だろう。ちっとも本気で取り上げてくれない。たまたまマスコミに、ちょっと取り上げられるのが関の山だ。だが、悲観的にばかり考えてはいられない、何か方法はないのか――そうだ、私は生物の教師なのだ。わざわざ外へ出向いても、聞く耳を持たない大人は金輪際聞いてはくれぬ。でも、子供たちは違う。そう信じたい。

現在、高校では、理科１で「自然と人間」の項を扱う。生物では、「生物の世界」で生態を扱う。いったい、我々生物教師は、生徒に何を教えるべきなのか。受験技術か、いや、まさか！そんなことは、受験科目に生物の必要な一部の生徒が、よそで学べば良い。その他大勢の子供たちに、通り一遍の知識を暗記させて何になるのか。それより、子供たちにこそ、まずなによりも自然を、そして自然保護を、教えたら良いのではないか。彼らは、一部で美化されているほど純粋ではないが、しかし大人達ほど金の亡者にはなっていない。そうして、何よりも、我々亡きあとの社会は、彼らのものなのだ。自然保護運動は、一過性であってはならない。悲観的に言えば、地球上の最後の自然のひとかけらが尽きるまで――即ち、永遠に、続けて行かなければならない。子供たちに、後々の世代に、伝えなければいけないのだ。誰がそれをやるのか。現在、自然保護運動に携わる人々は、自分の子供に伝えるだろう。新聞、雑誌、TVによって、自ら目覚める者もいよう。だが、それではあまりに消極的ではないか？

残念なことに、大半の教科書では、生態は最終章である。歴史の教科書における近・現代史と同じ扱いなのだ。省略している学校も少なくなかろう。しかし、人間は、よく知っているものごとは大切にし、知らないものごとは粗雑に扱うものだという。それが本当だとしたら、日本でこれほど自然が粗雑に扱われるようになった、その真犯人は、他でもない、受験用の知識の詰め込みにやっきになり、本当の自然を教えようとしない、我々ではないだろうか？自然保護を表面的な流行で終らせるのではなく、本当に発展させるために、私はひとりで自然を楽しむのではなく、少しでも多く子供たちに教えたいと思う。今の子供たちは自然をTVでしか知らないのだから。

（長岡農業高等学校　わたなべ・あきら）

読書案内

笹川通博

大熊　孝 著「洪水と治水の河川史―水害の抑圧から受容へ―」　平凡社・自然叢書７．￥2,800

河川は時に氾濫し、大きな災害となる。しかし平時は生活に不可欠な水を供給する。水害を抑圧すれば日常生活の水に困る。水を確保すれば水害を免れない。こうした矛盾をどう解決しようとしてきたかが、本書の主題である。

近代土木技術が確立する以前、洪水への対応策は受動的であった。すなわち家の作りや村落の形態、人同士の連帯が、水害のあることを前提としていた。近代土木技術が確立し、水害を人の力で抑えることがある程度可能になると、それ以前の受動的な対応策は消えていった。

しかし人の力、すなわち科学技術による水害の抑圧には限界がある。何百年に一度、あるいは何千年に一度の大洪水が起こった場合、現状の河川管理では対応できないのである。そこで著者は、ある程度の水害は受容することを提案する。一生に一度くらいは、水害を体験してもいいではないかという。そこで生じる人同士のかかわりに、著者は注目するのである。

蛇口をひねるとあたかも自然に湧くかのように水が出る。日頃はそのありがたさを感じる機会がない。感じたとしても、特に僕達のような若い世代の者は、実際の体験に基づかないことが多い。一生に一度ぐらいの水害は、確かに人と自然との結びつきを認識させるだろう。それと同時に、人と人との結びつきも。それは煩わしいことである。これを避けるために、人は技術を発展させて来たとも言える。その技術に限界があるとすれば、考え直さなければならない。たとえその限界がまだ先であっても、人間の本当の幸福とは何かが問題なのだ。自然とのかかわり、人同士のかかわり、そういうものを忘れて孤独に走る方か、自然や人との煩わしいかかわりを保ちつつ暮らす方か。ぼくたちはもっと現実的に考えなければならない時期に立っている。なぜならば科学技術の矛盾が様々な所で現れ始めているからである。

なお著者は新潟大学工学部教授である。信濃川の治水史も大きく取り上げており、本県関係者には興味深いであろう。